

夏期講習だより

夏期講習記録

文責 研修委員長 小川 浩（辰野中学校）

令和8年7月28日、29日に行われました第77回夏期講習の記録・まとめです。
 のべ参加者数51名、皆様に支えられて講習が無事終了いたしました。
 文字数が多いですが、ご容赦いただき、ご一読いただければと思います。

令和8年度

第77回 上伊那教育会 夏期講習

期 日 令和8年7月28日（火）・29日（水）

会 場 上伊那教育会館 講堂

テキスト 『西田哲学選集』第一巻『西田幾多郎による西田哲学入門』
 第二部 『善の研究』
 第一編 「純粋経験」 第一章「純粋経験」
 第二編 「善」 第一章「行為上」
 第二章「行為下」
 第三章「意志の自由」
 第四章「価値的研究」
 第九章「善（活動説）」

講 師 松本啓二郎 先生（大阪教育大学教授）

助 言 者 唐澤 正吉 先生（元高遠中学校長）

講演会 松本啓二郎 先生（大阪教育大学教授）
 『現代とサイバネティクス』

7月28日（火）		7月29日（水）	
受付	9:45～10:00	受付	9:10～9:30
開講式	10:00～10:15	討議4	9:35～11:20
討議1	10:20～12:05	まとめ	11:20～11:40
昼食	12:05～12:45	昼食	11:40～12:40
討議2	12:50～14:35	講演会	13:00～14:40
討議3	14:45～16:30	閉講式	14:40～15:00
諸連絡	16:30～16:35		
退場	16:40～16:50		

上 伊 那 教 育 会
 第77回夏期講習運営委員会

■開講式より

○佐々木 英明 上伊那教育会長 ごあいさつ

皆さん、こんにちは。猛暑が続いています。

今年も、この日のために、事前に4回の読み
 合わせ会を行い、学習してきました。大阪教育
 大学教授の松本啓二郎先生には、読み合わ
 せのポイントについて問いを交えながら紙面
 にてご指導をいただき、元上伊那教育会長の
 唐澤正吉先生には、読み合わせ会での討議を踏まえながら直接ご指
 導をいただきました。



そして、今日、明日2日間の夏期講習では、松本先生にも教育会館に
 お越しいただき、唐澤先生とお二人で、直接ご指導をいただきます。お
 二人の先生方には、討議にも加わっていただき、参加者と顔と顔を合わ
 せながら直接ご指導いただけますこと、大変嬉しくありがたく思っており
 ます。松本先生、唐澤先生、よろしくお願いいたします。そして、明日の午
 後、松本先生には「現代とサイバネティクス」と題してご講演もいただき

ます。松本先生重ねてよろしくお願いいたします。

この「夏期講習」ですが、今年で77回を数えます。始まりは昭和24年、飯島町の西岸寺で8月3日から3泊4日の日
 程で行われた「西岸寺講習」に遡ります。当時は、上伊那郡下の青年教師が集まり、企画から運営まで一切を担って
 行われていたそうです。その講習が、哲学の講習へと特化され、本日の「夏期講習」へとつながってきています。まき
 くに、上伊那教育会の理念の一つである「たゆまぬ教師の研鑽」を象徴する、歴史と伝統のある研修として位置付いて
 います。



開講式で仰望を斉唱 指揮は赤穂南小の佐藤重浩先生、伴奏は清水ひろみ副会長

さて、私たちは、なぜ哲学を学ぶのでしょうか。なぜ、哲学
 にひたるのでしょうか。その答えを言葉にできない私です
 が、テキストを読み、自らの体験を元にしながら皆で語り合
 い学び合うことが、意識しなくても自然と、自分の授業や学
 級、目の前の子どもたち、そして自分自身のあり様を見つ
 め直すことにつながってくるということは、確かであると思っ
 ております。

レポートを作成してくださった大月美怜先生（伊那小）、
 栗谷裕子先生（南部小）、有賀祥子先生（富県小）、大久保太郎先生（赤穂中）、お一人お一人の思いが込められ、み

んなで話してみたくなるレポートをありがとうございました。また、運営に関わっていただいた先生方、読み合わせ会の運営や夏期講習の企画運営ご尽力いただき、ありがとうございました。

ただひたすらに無心になって「善の研究」を読み、浸り込む2日になればと思っています。ご参加いただきました先生方にとって、実り多き2日間となりますことをご期待申し上げ、開講の挨拶とさせていただきます。

■討議①～④より

○松本 啓二郎 先生（大阪教育大学 教授）のご指導

★討議①

- ・大月先生のレポートはとてもよい。林が海のように感じられていた。大月先生が子どもの近くで風を波ととらえることができた。大月先生が純粹経験をしていると感じた。
- ・大月先生が子どもと一体になりダンゴムシと一体となり、ダンゴムシを外から観察するのではなく、だんだんとダンゴムシになっていった。非常に西田的。自分になるという視点で見ている。
- ・おもしろいと思ったところはAさんの経験と考察のところ。レポートより何かが見えてくる、聞こえてくるその前の瞬間が純粹経験と述べられその後、ダンゴムシと子どもとの対話から主客が分かれた後、その交わる所も純粹経験は持続して展開していくんだとまとめられた。子どもを観察しながら感じられている。
- ・82ページ7行目「意識上の事実としての現在には、いくらかの時間的継続がなければならぬ。」広がりのある現在。我々の生きている現在は、過去の経験というものを受け止め未来をどうしようかととらえる。現在は一瞬で消えるものではなく、連続してきているもの。それが重要。
- ・グループ討議で出された小学生低学年、高学年、中学生との対比。中学生だったらどうなのか。83ページ6行目「初生児の意識の如きは明暗の別すら、さだかならざる混沌たる統一であろう。」主客未分。赤ちゃんの経験。赤ちゃんは、経験を通して知恵がついてくる。自己意識が芽生えてくる。だんだん加えられていくもの。根底になるのが純粹経験。中学生になってくると思いを押しこんだり押しこめたりして自我、周りの世間との対立が出てくる。純粹経験は全く消えてしまうものではない。修学旅行で行くディズニーの写真を見て目を輝かせて喜ぶ姿、その瞬間には主客合一されている。金儲けをしてもうける。だからといって純粹経験が消えてしまうものじゃない。学校で掃除を嫌々やっても途中から夢中になることがある。畑の草取りを必要にせまられてやっていて無我夢中になる。大人になっても純粹経験が消えてしまうわけではない。



・純粹経験は様々なかたちで分化発展していく。対立したままで終わらず、分化していくもの。

★討議②

- ・第3編の第1章と第2章は、結論を出すような章ではない。
- ・「動作」「行動」「行為」は外から見てると似たように見える。今、私はマイクを持って話をしているが、見方によっては、「動作」「行動」「行為」になる。「動作」は一般的に身体の動きを表している。ただただ無意識にやっている身体の動きであり、しゃっくりなどの本能的な動きである。「行動」はある程度の目的がある身体の動きを表している。歯を磨いたり、顔を洗ったりすることには、ある目的がある。人間だけではなく動物にも当てはまることで、「動作」にもなるし、「行動」にもなる。人間は「行動」に加えて「行為」をする。動物は「行為する」とは言わない。「行為」には、西



討議①を分担した哲学研修委員の先生方

田がとりあげている「意思」がある。人間の「意思」には、「理性」がかかわってくる。「動作」には良いも悪いもない。「意思」を持って行われる動きに、「善」が出てくる。

- ・Aグループから「外からは動作だけれど、内からは意思」という話が出た。「やっていることは悪いけれど、その内にある意思は悪くない」それは、道徳と法の問題。合法的であるからと言って、道徳的であるとは限らない。
- ・「善」とはいったい何なのか。「人を殺したい」ということを実現することは「善」といえるのであろうか。西田が言うところでは「人を殺したい」は「意思」ではなくて「欲求」だと考えられる。「意思」は様々な行為を統一する力。栗屋先生のレポートで考えると「すてきな風鈴を作ろう」という「意思」があって、そこに様々な考え方が展開していく。そういうものが「意思」であり、それに対して「やりたいことをやろう」というのは、ただの欲求である。
- ・次に、評価する、価値づけすることについて、評価する者、評価される者が対立している。評価がいいか悪いかは別の問題である。
- ・栗屋先生のレポートの図工の場面は、西田の考える意思を見てとりやすい場面。「すてきな風鈴を作ろう」という思いが根底にある。それが様々な仕方です「スイミーの世界を表現しよう」となる。子どもの様々に展開していく思いを、子どもがうまく表現できている。西田は「動機」と「欲求」を分けているが、人間において、これは「動機」、これは「欲求」と区別できるようなものではないかもしれない。要は、根底に「意思」があって、それが様々に分化、発展していく。そうやって人間は「行為」を展開していく。組体操の例で言うと「組体操を成功させたい」という「意思」があって、様々に展開していく。合唱コンクールで「よい合唱をしよう」という「意思」があって、様々に展開していく。
- ・チャボの小屋については、「小屋を作りたい」という「意思」は見てとりやすい。でも、算数や国語においては難しい。小学校の低学年において、算数や国語に「意思」を持って勉強させるのは難しいと思う。だから色々な目的を与えてあげることが大切。でもこれが、中学校3年生や高校生になると、自分で「意思」を持ち始める。例えば中3の子どもが「医者になろう」という「意思」を持つと、そこには自分の経験の中から動機があって、「人を助けたい」などの欲求があって、そして意思を実現させるために、様々な決断がある。子どもは「医者になりたい」という大きな「意思」を展開していく中で、勉強していく。



★討議③

- ・「人間の意志というのは自由なのか、必然なのか」という議論は古来よりある。近代の自然科学が発展し、物体としての自然に関する研究が進み、自然法則というものがある、ということが理解されている。人間の身体は物体であり、病気になると医学では物体として治療する。物体は自然なわけで、人間の身体も自然法則に従っているとすれば、人間の自由な意志はない、ということなのか？いや、ある。
- ・こうした議論を受け継いで、西田の立場から「意志の自由」とはどう考えられるのか。ここで西田にとって重要なのが「意志」ということになる。西田は自由を「意志」から考えていこうとしている。
- ・有賀先生のレポートにもあるとおり、辞書に書かれている「自由」は、自分の思うままにふるまうこと、何でも好きにやってよい、つまり欲望のままに動く「自由」（欲望の奴隷）ということが出来る。動物的である、とも言える。一方、「意志の自由」は、理性に関わるものであり、理性に従って行動するのが「自由」という考え方である。これは人間にしかできない。
- ・177ページ2行目「精神がこの己自身の法則に従うて働いた時が真に自由であるのである」人は自身の「こうせねばならない」というルールに従っている、ということである。例えば、戦争で捕虜になり、空腹状態が続いている状況で、地面に食事がばらまかれた時、人としての誇りを持っていたら「そんな辱めを受けてはいけない」と、食べない選択ができる。しかし、動物は欲望に従って食べる。子どもも、まだ己の法則を持てていないから食べるだろう。これが、



理性に基づいた意志、そして意志に従った自由ということになる。

・各グループの話し合いの中で、子どもたちが自分でルールを決め、自分たちが主体的にルールに従って行動する、というような話があった。これは「自律」という事柄になる。自分自身で自分の行動を決めていく、律していく、ということ。「自律」というのは、理性が自分の行動を決める、自分の決めた規則に従うことである。

・社会に目を移すと、我々は法律に従って生活しているが、そもそも法律を誰が決めたかという、国民つまり我々自身ということになる。一見、法律というのは「抑圧」だが、自分たちで決めた枠組みだから、これに従うことが「自由」である。

・西田の議論の一番の特徴は「意志」という考え方である。グループの話し合いの中で、子どもたちに「自由にやっていいよ」と言うと、「何をしたらいいかわからない」と返ってくることもある、とあったが、これは子どもたちに意志がないからである。つまり、意志がない限り自由ではないのである。自分自身で自分の行為を決められることの根底には、意思があるかどうかにかかってくる。意志は分化発展していくもので、177～178ページに「現実にしてしかも理想を含み、理想的にしてしかも現実を離れぬというのが意識の特性である。…すなわち理想が己自身を実現する一過程にすぎない」とある。つまり、我々の意志には理想を含んでいる、ということ。その理想は即座に実現するものではなく、さまざまな失敗や挫折もあるだろうが、その根底に意志があれば次の行動を起こすことができるのである。自分の意志に従うということが西田の言う「意志の自由」ということである。また、178～179ページに「これは実に実在の根本たる無限の力であって、これを数量的に限定することはできない。全然自然の必然的法則以外に存するものである。我々の意志はこの力の発現なるが故に自由である」とある。つまり、西田の考える自由、意志というのは決して一個人の意志ではなく、実在（宇宙全体）の根本たる無限の力が作用している、ということなのである。

★討議④

- ・意志とは、動機があり、欲求があり、決意のあるものである。
- ・「医者になろう」というのは意志である。医者になりたいと考えた動機があり、医者になるためにいろいろなことを考えたり決めたりする、つまりいろいろな考えを統一していく働きがあるので、意志といえる。
- ・幸福は1人ひとり違うというが、欲求は個体でそんなに変わらないのではないか。「竹は竹、松は松」というように、アリならアリの、サルならサルの欲求や行動パターンがあり、人間の欲求に個体差はあまりない。
- ・意志の自由の「意志」とは個人のものでない。「吾人の理想」というのは「みんなの理想」のことである。
- ・Rさんがピアノをひきたいというのは、意志ではない。「ピアニストになろう」、「音楽家になろう」と考えることは意志である。そのために練習したり学校を考えたりする統一する力をもつからである。それが意志である。
- ・実現されれば善というわけではない。善とは人として、みんなの理想に従ったものが善とされる。誰か1人でなく、人間全体が望むことが善である。
- ・Eグループの野球の例のように過程が大切で、対立、分裂などの問題がおきても、根底には統一に向かう力がある。
- ・理論的研究と実践的研究は対になるものだと思われる。これは、アリストテレスが人の知的活動をテオリア（理論）とプラクシス（実践）に分けて考えたことに基づいていると言われている。しかし、西田はこの2つは根本において区別できないという立場をとっている。



■講演会の感想より

○松本 啓二郎 先生（大阪教育大学 教授）のご講演の感想の一部…（講演会映像はケルンに保存）



- ・お話を聞いて特に心に残ったのは戦争に機械が導入された場合というお話だったのですが、戦争に機械が導入された場合人間が制御できるのだろうかと考えさせられました。
- ・グローバル化、人間の将来について、深く考えたことがなかったので、松本先生の哲学的な視点からのお話はとても新鮮でした。急速に変化する時代を生き抜くために、哲学の考え方が大切なのではないかと思います。
- ・今回、ウィーナーの考えに触れ、第二次世界大戦後という時代から、現代社会にも通じる問題について考えられていたことに驚き、その先見性の高さを強く感じました。また、サイバネティクス発展によって社会の変化はますます速くなっているように感じます。そのような時代だからこそ、一度立ち止まり、「本当にこれでよいのか」と問い直す姿勢が大切であることを、今回の夏期講習や事前読み合わせを通して改めて考えさせられました。
- ・昨年の講演からの継続性もあり、興味が深まりました。語源に立ち戻ることにより物事の本質に迫り、また考察していくことの楽しさと意義深さに触れることができました。さらに、現代における危うさについて考えさせられました。松本先生の講演がわかりやすく、毎年のライフワークにしていきたい。
- ・お話をお聞きし、非常に不安な気持ちになりました。「国」としての不穏な動き、戦争によりより世界とのつながりを感じざるを得ない今日。一人では抗いようのない動きであるが、改めて「一人」がちゃんとものを考え、行動できる人になっていかなければならないと思いました。自分の生きている世界のかじ取りが自分でできるようにしていくにはどうしたらよいか、学校として、義務教育に携わるものとして、自分としてどうあったら良いか考えていかねばならないと思いました。
- ・とてもスケールが大きくて難しいところがありましたが、自然界の中にいる人間として、自然の中で生かされていること、人間は理性で動くことができること、考えて判断できることを意識し、1つ1つの物事に対して「本当にこれでよいのか」吟味して行動しなければならぬと思いました。
- ・読み合わせをしてきたものは100年前の哲学だったので、現在の社会の状況を教えてもらうことで、読み合わせの時とは違う視点で哲学について考えることができました。
- ・学校は、情報を子どもに発信する手段であること。教師の一人として、自覚をもって子供にかかわりたいし、この先子どもとの拠り所が学校であれるように努めたい思いになりました。
- ・「フィードバック」の考え方、子どもたちが自身を成長させていくために、授業の中でも生かしていきたい。また、人工の機械も学習したり増殖したりしていることを考えると、どうそれを制御していくのか、誰が正確な判断ができるのかなど、考えることが多い時間でした。
- ・昨年の『「グローバル化はいつから始まったのか？」 ユンガー「労働者」：支配と形態1930年代から①全体性②同一化・画一化③連続性・持続性④主体の消滅 といったグローバル化の特徴を読み解くことができる。』に続き、①③⑤自己関係性というグローバル化の性格はウィーナーのサイバネティクス1948年の本質をなすものであり、あらゆるものが管理され、装置が（統治が）自律的に動き続けるものに通じていくことをわかりやすく示唆していただき、勉強になりました。グローバル化はよいことなのかと疑問・不安も感じました。
- ・「球になる」＝主体の消滅という考え方に、問いが立ち上がりました。「グローバル化」が私たちにもたらすこと、それは漠然と「よいこと」ととらえていましたが、果たして「よいこと」なのか？私が私として生きていくためのすがる軸とは？そもそもすがる軸などなく、今、これからに抗して自律できる私か？先生のお話を伺ってわからなくなりました。考えます。これからも。
- ・興味深い語源の話から引き込まれ、時間が早く過ぎていきました。あらゆる事象が「球化」の意味での globalize を

した結果、人間一人一人の持つ個性は先の未来で果たして必要なのだろうか、とある種不安にもなりながら、それでも我々の主体・自己というものは消えないのではないか、というお話が大変心に残りました。

・”サイバネティクス”という新しい言葉を教えていただいた。語源からわかりやすくお話しいただき、なるほどと思う場面がいくつもありました。80年も前から現代のことを予測されていたことにも驚かされました。これからの社会がどのように進んでいくのか考える機会になりました。

・身近なものや動植物等のお話もあり、とても分かりやすかったです。子どもたちの「やりたい」などの主体性を大切に、実現に向けてどのようにフィードバックしていくのが大切だと感じました。

・現代を生きる私たちにとって、どのような時代にあつてどう生きるかを考えるヒントをいただけたように思います。サイバネティクスの概念は難解であったが、少しグローバル化や世界のシステムを詳しく考えることができました。

・ウィナーのサイバネティクスの話を中心に興味深い話題提供をいただき、ありがとうございました。グローバル化のもと知らず知らずのうちに最適化されている私自身がいることも意識しました。主体として意識できる自分を作れるよう、教育にかかわっていきたくと思いました。

・サイバネティクスという言葉をはじめて聞きました。生成AIなど人間のように学習する技術が登場しました。今回の講演で機械と生物の神経系に同じ性格が見られるということを聞き、機械(技術)の発展の速度に驚くとともに、少し怖さも感じました。



○清水ひろみ 上伊那教育会副会長 閉会のごあいさつ



松本先生、本日は「現代とサイバネティクス」という演題のもと、大変示唆に富む、深いご講演をいただき誠にありがとうございました。

先生のお話の中で特に印象的でしたのは、「グローバル化」を単なる政治的・経済的な現象として捉えるのではなく、語源であるラテン語の「球(たま)」から紐解き、「全体性」「連続性・持続性」「自己関係性」という本質を持つ「球化(たまになること)」として捉え直すという、非常に新鮮で哲学的な視点でした。

また、「サイバネティクス」が、ギリシャ語の「舵取り」を語源とし、機械と生物の垣根を越えた「通信と制御」の理論であり、「フィードバック」や「自己関係性」の仕組みが、例えば AI など、社会の動きにまで深く息づいていることを分かりやすく紐解いてくださいました。

「フィードバック」は、教育現場では評価の言葉としてとらえられがちですが、「次の行動を変えるための新しいデータ」ととらえると、その重要性が譜に落ちる気がします。子ども自身が「今の自分の常態」と「目指すゴール」のズレに気づき、自ら舵を切りなおせるような環境をどうつくっていくか。フィードバックを意識した授業設計は、教師の授業改善の柱として、大事にすべき視点であると気づかせていただきました。

松本先生には、この二日間のご指導に加えて、これまで四回にわたる事前の読み合わせにおいても、委員の先生方のレポートに対して一つひとつ丁寧なご指導をいただき、読み合わせ範囲の考えるべきポイントを教えてくださいました。本日のご講演、そ



閉講式での松本先生(左)と唐澤先生(右) 唐澤先生には主に事前読み合わせ会で毎回熱いご指導をいただきました。

してこれまでのご指導に心より感謝申し上げます。

松本先生の今後ますますのご活躍とご健勝をお祈り申し上げ、御礼の言葉とさせていただきます。二日間、本当にありがとうございました。

■閉講式より

○感想発表（宮田小学校 竹前 創太先生）



この2日間の研修や読み合わせを通して、哲学について初めて深く学びました。専門的な言葉や考えかたも多く、最初むずかしさを感じましたが、松本先生、唐澤先生の丁寧なご指導のおかげで、多くの学びを得ることができました。

また、レポートも大変分かりやすくまとめていただき、研修の中で哲学についての理解を深めることができました。さらに、夏期研修では多くの先生方と哲学について意見交換をする中で「自分のクラスで実践してみたい」「あの時クラスの子どもたちはこんなことを考えていたのか」と新たな気づきを得ることができました。

今回の学びを活かし、2学期からの学級経営や授業づくりに積極的に取り入れていきたいと思います。

○感想発表（中川西小学校 小島 汐織先生）



今回、初めて夏期講習に参加させていただきました。私は最初、読み合わせから参加したのですが、哲学というものは思っていた以上に難しく、テキストを読むだけではなかなか理解が追いつかないこともあり、私には難しすぎるのかと心が折れそうになることもありました。でも、レポートを読ませていただいたり、唐澤先生や松本先生にご指導いただいたりする中で、具体的なエピソードを聞かせていただいたことで、自分の中で腑に落ちて理解できるようになってきました。さらに、参加されているいろんな先生方と話し合いをしたことで、難解な言葉を自分の言葉で噛み砕きながら語り合うことができ、本当に大きな学びになりました。

特に、「純粹経験」という今まで考えたこともなかった考え方を知り、その視点から子どもたちの様子や体験を見つめ直せたことは、私にとってすごく大きな発見でした。こうして身近な「教育」というテーマと結びつけることで、普段の教育活動とはまた違う角度から、いつもの自分の視点を見つめ直したり、じっくり考え直したりする貴重な時間になりました。先生方のご指導や、みなさんとの温かい話し合いがあったからこそ、自分なりの深い学びとして受け止めることができました。

ここで得られた新しい視点や学びを、これからの子どもたちとの関わりや、日々の授業の中にしっかりと生かしていきたいと思います。本当に実りある夏期講習になりました。ありがとうございました。

○小川 浩 哲学研修（夏期講習）委員長 お礼のことは

「なぜ今哲学が求められているのか？」家の近所の書店には多くの哲学書が並んでおり、静かなブームとなっています。

哲学初心者の私にとっては、「善の研究」のテキストによく出てくる「純粹経験」や「意志」といった言葉に触れるたび、「日々の慌ただしい学校業務の中でこの難しい哲学がどう役立つのだろうか」と、正直不安や戸惑いがありました。

しかし、事前読み合わせ会やこの夏期講習で多くの先生方と語り合い共に思索を深める中で、哲学＝「正解」を教えるものではなく、あくまでその人が考えるための「思考の枠」を提案するものであり、だからこそこの「正解」のない時代に哲学が必要とされているのでは？と考えるようになりました。

西田哲学が教えてくれるのは、頭の中だけの難しい理論ではなく、「評価や先入観を一度手放して、目の前の事実や子どもたちにまっすぐ向き合うこと」の大切さではないでしょうか。



私たちは日々、時間に追われ、「こうあるべきだ」という指導観や評価に縛られてしまうことがあります。けれど、子どもたちが発する言葉や行動、あるいは自分自身の迷いに対して、まずありのままを受け止めてみる。そうした「問い直し」の姿勢こそが、教育の原点であり、西田哲学のいう「意志」を持つことにつながっていくのだと深く実感いたしました。忙しい日常から少しだけ離れ、自分自身の教育観や人間観を静かに見つめ直す、そんな贅沢で貴重な時間がこの夏期講習の醍醐味であり、昭和24年から77回も続いている所以だと感じています。

この2日間、松本啓二郎先生には、討議の場面では西田哲学の奥深い世界を分かりやすく丁寧にご指導をいただき、講演会ではまた新たな哲学の世界を教えていただきました。

事前読み合わせ会では、唐澤正吉先生より現場の先生方に寄り添ったお話をしていただきました。その中で、「正解」をすぐに求めずモヤモヤしながらも考え続けることが大事だと教えていただきました。

これからの生活ですぐに何か変わるというわけではないかもしれませんが、この2日間の学びや気づきを、2学期からの子どもたちとの関わりや先生方同士の対話に少しでも活かしていただければ幸いです。

最後になりましたが、お忙しい中事前に資料をご準備いただき、ご指導くださった松本先生、唐澤先生、ともに語り合ってくださいました先生方、事前読み合わせ会から多くの準備に気を回してくださいました委員の先生方、事務局の先生方、すべての方々に感謝して、お礼の言葉とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。



第77回夏期講習 記念写真

(最前列) 担当幹事、研修副部長、研修副部長、副会長、唐澤先生、松本先生、会長、研修部長、哲学研修委員長、哲学研修副委員長

(2列目・3列目) 哲学研修委員、夏期講習委員、各討議の司会者、レポーター、記録者の先生方

令和8年度 第77回 上伊那教育会 夏期講習

令和8年7月28日 発行

編集・発行・印刷・製本 上伊那教育会 夏期講習運営委員会

哲学研修委員	委員長	小川 浩 (辰野中)	副委員長	佐藤 重浩 (赤穂南小)
	北 部	大口 琢弥 (辰野中)		藤森 三佳 (辰野中)
		毛利 裕美 (箕輪中)		
	中 部	大月 美怜 (伊那小)		柳澤 侑哉 (手良小)
	南 部	中野 晃宏 (赤穂東小)		
夏期講習委員	北 部	月岡 純平 (南箕輪中)		
	中 部	清水 涼太 (東部中)		
	南 部	竹前 創太 (宮田小)		

上伊那教育会

〒396-0021 伊那市伊那 3500 番地 1-401 (伊那市生涯学習センター「いなっせ」4F)

TEL 0265(72)3416 / FAX (0265)73-3758 / Mail edu@kamiina.jp